OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収文献概要（一）
Author(s)	金城, 未来; 竹村, 渉
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 149-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　麗号（総四十八号）平成二十一年六月　一四九―一六一頁

『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収文献概要（一）

金城未来　竹村　渉

はじめに

二〇〇八年十二月、上海古籍出版社より馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』が刊行され、日本には二〇〇九年一月に輸入された。これまで『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、二〇〇一年十一月に第一分冊、二〇〇二年十二月に第二分冊、二〇〇四年三月に第三分冊、二〇〇四年十二月に第四分冊、二〇〇五年十二月に第五分冊、二〇〇七年七月に第六分冊が刊行された。本書は、その続編の第七分冊に当たる。

この第七分冊には、『武王践阼』、『鄭子家喪』（甲本・乙本）、『君人者何必安哉』（甲本・乙本）、『凡物流形』（甲本・乙本）、『呉命』の五篇が収録されている。

本稿は、その速報である。以下の二点について（一）として報告する。まず、原釈文者による「説明」と「釈文考釈」とに基づき、第七分冊全体の形制一覧を掲載する。次に、第七分冊所収文献のうち、『武王践阼』『鄭子家喪』の二篇を取り上げ、その概要を記す。

一　上博楚簡（七）形制一覧

形制一覧（一五〇頁参照）は、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』の原釈文者による「説明」に基づき作成し、各文献ごとに、竹簡の枚数、簡長、編綫、契口、簡端、完整簡（完簡・整簡）、残簡、字数、篇題、備考を記した。

【補足】

（1）表中の「No.」は、『中国研究集刊』第三十八号（別冊特集『戦国楚簡研究二〇〇五』、二〇〇五年十二

上博楚簡（七）形制一覧表

No.	分冊	名称	枚数	簡長（cm）	編綫	契口	簡端	完整簡（完簡・整簡）	残簡	字数	篇題	備考
38	七	武王践阼	15	43.7	三道	右	平斉		15	491		第十簡と第十一簡との間に脱簡がある。
39	七	鄭子家喪　甲	7	33.1 ～ 33.2	両道	右	平斉	7（7・0）		235		乙本第五簡は完簡とされるが、図版を参照すると、第五簡上端に欠損が確認でき、第五簡上端にもう一字分あった可能性がある。
		乙	7	47.5	両道	右	平斉	1（1・0）	6	214		
40	七	君人者何必安哉　甲	9	33.2 ～ 33.9	両道	右	平斉	9（9・0）		241		
		乙	9	33.5 ～ 33.7	両道	右	平斉	5（3・2）	4	237		
41	七	凡物流形　甲	30	32.2 ～ 33.6	両道		平斉	23（23・0）	7	846	甲本第三簡背面「凡物流形」	乙本は残欠が酷く、残簡を綴合したものが多い。また、乙本は原釈文の「説明」において「二十一簡」と記載されているが、実際は二十二簡ある。
		乙	22	39.4 ～ 40.1	三道		平斉	5（2・3）	17	601		
42	七	呉命	9	約 52	三道		平斉	1（1・0）	8	375	第三簡背面「呉命」	原釈文の「説明」において、第九簡は完簡とされるが、続く各簡の解説では、第九簡の下部に残欠が指摘されている。また、簡長約 52 cmとは、現存する竹簡の最長簡（第九簡 51.1 cm）から、原釈文者が推測した完簡の長さを示す。

月）掲載の「上博楚簡形制一覧表」、『中国研究集刊』第四十号（二〇〇六年六月）掲載の「上博楚簡（五）形制一覧表」、『中国研究集刊』第四十四号（二〇〇七年十二月）掲載の「上博楚簡（六）形制一覧表」からの連番である。

（2）完簡と整簡との区別については、『中国研究集刊』第三十八号掲載の「書誌情報用語解説（二）」において、「もともと完全な形を保っている竹簡を「完簡」、接合して文字の欠落が無いとした竹簡を「整簡」」と定義している。本表もこれに従う。

（3）原釈文者が「完簡」としている場合でも、実際には欠損していることがあるが、今回は原釈文者の記載に従った。その点に関しては、備考に記している。

（4）表中の「簡長」とは、基本的に完簡の長さを示しているが、すべて残簡の場合は、最長簡の長さを記している。

二　上博楚簡（七）所収文献概要（一）

［凡例］

（1）書誌情報……原釈文者、篇題の有無、竹簡の状態、総字数、標号など、書誌情報を掲載する。また、竹簡の状態を各々図示する。

（2）概要……第七分冊所収文献のうち、『武王践阼』『鄭子家喪』の内容について概説する。その際、原釈文者の解釈に加え、ネット上で発表された論文・札記などの諸説も参考にしている。論文・札記などについては、（4）参考文献を参照。

（3）補足・その他……概要執筆者による補足、及び現時点（二〇〇九年三月現在）での私見などを記載する。

なお、書誌情報に関する専門用語は、『中国研究集刊』第三十三号（別冊特集『新出土資料と中国思想史』、二〇〇三年六月）掲載の「書誌情報用語解説」、及び『中国研究集刊』第三十八号掲載の「書誌情報用語解説（二）」を参考にした。

（4）参考文献……『武王践阼』『鄭子家喪』については、原釈文に対してすでに数々の異説が提示されている。ここでは二〇〇九年三月までに、ネット上で発表された論文・札記類を、参考文献として掲載する。

（金城未来）

『武王践阼』（ぶおうせんそ）

（1）書誌情報

原釈文者は陳佩芬氏。篇題はなく、『大戴礼記』武王践阼篇（以下、現行本と表記）と多く重複することから、『武王践阼』と名付けられた。ただし、現行本の篇名は、冒頭句「武王践阼」から取られているが、上博楚簡『武王践阼』（以下、本篇と表記）は「武王問師尚父」から始まり、「武王践阼」の語句は見られない。

全十五簡で、全て残簡。第一簡から第十簡（以下、前半部分と表記）、第十一簡から第十五簡（以下、後半部分と表記）は、それぞれ連続して読めるが、第十簡と第十一簡との間には、文意の明らかな断絶があるため、脱簡があると推測される。

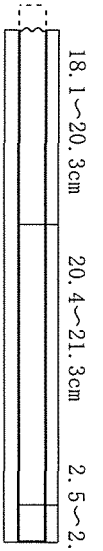
前半部分は、重要な語句や話の流れなど、現行本と一致するところが多い。しかし、後半部分は、現行本と部分的に合致する箇所もあるが、重要と思われる語句に異同が見られる。また、武王が銘を刻む場面も記されておらず、現行本と一致する内容とは言い難い。

なお、陳佩芬氏の「釈文考釈」では、末尾に本篇と現行本（『文淵閣四庫全書』所収本）とを対照した表が付されている。

編綫は三道。右契口。各簡上端部分が残欠しているが、下端により、簡端は平斉と分かる。現存文字数は四百九十一字（重文八）。各簡の簡長に大差はないが、字数は二十八字から三十八字とやや幅がある（表1参照）。第十三簡から第十五簡には、墨釘が多く見られる。第十五簡に墨鉤と留白とがあり、篇末であることを示している。

（表1）簡長と文字数

簡数	簡長(cm)	文字数
第一簡	42.3	32
第二簡	42.4	33
第三簡	42.6	34
第四簡	43.7	30
第五簡	42.4	33
第六簡	42.3	35
第七簡	42.9	34
第八簡	41.6	34
第九簡	42.3	31
第十簡	42.4	28
第十一簡	42.8	38
第十二簡	42.9	36
第十三簡	42.8	32
第十四簡	42.9	32
第十五簡	43.0	29



陳佩芬氏の竹簡の排列に関して、現時点で異説は提示されていない。ただし、前半部分と後半部分とを連続する一篇と見るかどうかについては、意見が分かれている（（3）「前半部分と後半部分との分割」を参照）。

（2）概要

牖の銘文が書かれた第十簡の末尾は、「毋」という語で終わっており、文の途中であることが明らかである。しかし、第十一簡の冒頭では、新たに武王と太公望との問答が始まっており、第十簡と第十一簡との間には、脱簡があると考えられる。よって以下、前半部分と後半部分とに区分して説明する。

前半部分は、武王が師尚父に「黄帝・顓頊・堯・舜の道」は今も存在するのかを問う場面から始まる。

師尚父は武王の問いに対して、それは丹書に記されており、見るためには斎戒が必要だと説く。

これを聞いた武王は、三日間斎戒した後、正装して南面した。しかし師尚父が、「先王の言葉が記されている丹書は、決して北面しないものだ」と諫めたため、武王は一旦西に向かってから南に曲がり、丹書に対して東面した。

武王が東面した後、師尚父は、「怠が義（敬）に勝てば国は喪び、義（敬）が怠に勝てば国は長じ、義が欲に勝てば民は従い、欲が義に勝てば兇である。仁によって国を得て、仁によってそれを守れば、その国の命運は百世までも続く。不仁によって国を得て、仁によってそれを守れば、その国の命運は十世ほどである。不仁によって国を得て、不仁によってそれを守れば、自分一代限りである」と丹書の言葉を述べた。

それを聞いた武王は恐懼し、席の四隅、机、鑑、盤、楹、枝、牖に戒めの言葉を銘した。その内容は、例えば、鑑の銘には「その前を見るなら、必ず後も考慮しなければならない」、盤の銘には「人に溺れるぐらいなら、むしろ淵に溺れた方がよい。淵に溺れても泳ぐことは出来るが、人に溺れては、救うことは出来ない」というように、各器物から連想される教訓である。

後半部分は、武王が太公望に「十句に満たない程の短い言葉で表される、百世までも長く国を失わないでいられる道」は存在するのかを問う場面から始まる。

太公望は武王の問いに対して、その道は存在する、と答えた。続いて武王がその道を知ろうとすると、自分は臣下であっても、丹書の言葉は聖人の言葉であるから、それを言うには斎戒が必要だと説く。

これを聞いた武王が七日間斎戒した後、太公望は丹書を恭しく持って来朝した。そして、太公望が南面し、武王が北面すると、再び武王は質問した。

武王が質問すると、太公望は、「志が欲に勝てば国は昌え、欲が志に勝てば国は喪び、志が欲に勝てば民は従い、欲が志に勝てば兇である。敬が怠に勝てば吉であり、怠が敬に勝てば国は滅ぶ。不敬であれば定まらない。強(つと)めなければ曲がる。曲がる者は敗れて、敬う者は万世までも続く。民を逆らわずに従順にさせるには、民の話を聴かなければならない」と丹書の言葉を述べた。

（3）補足・その他

◆前半部分と後半部分との分割

本篇を、陳佩芬氏は一篇としているが、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会や劉秋瑞氏は別の篇としている。

その理由としては、主に以下の四点が指摘されている。

A：字体が前半部分と後半部分とで異なっている。また、同一の字を記す際に、用いる字も異なっている。例えば、「欲」を前半部分では「谷」、後半部分では「欲」で表記している。

B：太公望という人名について、前半部分では「師尚父」と記され、後半部分では「太公望」と記されている。

C：叙述方法が、前半部分は詳細なのに対し、後半部分では簡易である。

D：竹簡が、前半部分の方が後半部分より長い

この中には疑問が残るものもある。Cは、前半部分で似たようなことを述べたため、後半部分では省略した、ということが考え得る。またDは、前半部分の竹簡の長さが、四一．六cmから四三．七cmなのに対し、後半部分の竹簡の長さが、四二．八cmから四三．〇cmと、前半部分の竹簡にも、後半部分のものより短いものはある（表1参照）。

しかし、AやBは注目すべき指摘である。上博楚簡（五）所収の『競建内之』と『鮑叔牙与隰朋之諫』とのように、書写者が異なるにもかかわらず、同一文献と見なされる篇もあるが、書写者の違いによって、人名の表記が変わった例は、上博楚簡中には見られない。

◆黄帝・顓頊・堯・舜之道

第一簡の「黄帝・顓頊・堯・舜之道」の箇所については、現行本では、「黄帝・顓頊之道」のように、「黄帝」と「顓頊」とを並記するものや、「帝顓頊之道」のように、

「顓頊」のみを掲げるものなど、テキスト間で異同が存在する。

この点は議論の対象となっていたが、本篇の発見によって、「黄帝」を含むものがより古い形であったことが判明した。

なお、本篇は、「堯」・「舜」の名も列挙されており、この点は現行本と大きく異なっている。

◆器物とその銘文

現行本と本篇とでは、武王が銘した器物が異なっている（表2参照）。

ただし、牖の銘文が書かれた第十簡以降は、脱簡が疑われており、現行本と一致する器物が、そこに記されていた可能性もある。

（表2）銘した器物一覧

上博楚簡	現行本
席の四隅	席の四隅
机	机
鑑	鑑
盤	盥盤
楹	楹
枝（扈？）	枝
	帯
	履屨
	觴豆
	戸
牖	牖
	剣
	弓
	矛

器物に刻まれた銘文は、本篇と現行本とで、おおよそ同じ内容である。

しかし、本篇の牖の銘（位は得難くして失い易く、士は得難くして外なり易し。勤むる毋く志さず、余之を知れと曰う）と類似するのは、現行本の戸の銘（夫れ名は得難くして失い易し。勤（つつし）む無く志さずして、我之を知れと曰うか。勤む無く及ばずして、我れ之を杖（た）つと曰うか。擾阻して以て之を泥む。風将に至らんとするが若ければ、必ず先ず揺揺たり。聖人有ると雖も、謀を為す能わざるなり）であり、牖の銘（天の時に随い、地の財を以てし、敬して皇天を祀り、敬して以て時に先だつ）とは異なっている。

◆丹書の言葉

現行本の丹書部分の文が、本篇では、前半部分と後半部分とのそれぞれに、一部分記されている（表3参照）。

（表3）丹書部分の比較

※原釈文者の対照表に従い、現行本の文章は『文淵閣四庫全書』所収本を使用した。

現行本	上博楚簡『武王踐阼』前半部分	上博楚簡『武王踐阼』後半部分
敬勝怠者強、怠勝敬者亡。義勝欲者從、欲勝義者凶。	怠勝義（敬）則喪、義（敬）勝怠則長。義勝欲則從、欲勝義則兇。	志勝欲則利、欲勝志則喪。志勝欲則從、欲勝志則兇。敬勝怠則吉、怠勝敬則滅。
凡事不強則枉、不敬則不正。枉者滅廢、敬者万世。		不敬則不定、弗力則枉、枉者敗、而敬者万世。
蔵之約、行之行、可以為子孫恒者、此言之謂也。且臣聞之。		使民不逆而順成、百姓之為聽。
以仁得之、以仁守之、其量百世。以仁得之、以不仁守之、其量十世。以不仁得之、以不仁守之、必及其世。	仁以得之、仁以守之、其運百［世］。不仁以得之、仁以守之、其運十世。不仁以得之、不仁以守之、及於身。	

（4）参考文献

■簡帛網（http://www.bsm.org.cn/）

・陳偉「讀《武王踐阼》小札」（二〇〇八年十二月三十一日）

・劉信芳「竹書《武王踐阼》"反昃"試說」（二〇〇九年一月一日）

・劉洪濤「談上博竹書《武王踐阼》的器名"枳"」（二〇〇九年一月一日）

・林文華「《上博七・武王踐阼》"民之反俛（覆）"解」（二〇〇九年一月二日）

・陳偉「《武王踐阼》"應曰"試說」（二〇〇九年一月四日）

・何有祖「《武王踐阼》小札」（二〇〇九年一月四日）

・高佑仁「釋《武王踐阼》簡的"其道可得而聞乎"」（二〇〇九年一月十三日）

・禤健聰「上博（七）零箚三則」（二〇〇九年一月十四日）

・熊立章「《上博・武王踐阼》引諺入銘與《烝民》引言入詩合論」（二〇〇九年一月二十九日）

・劉洪濤「用簡本校讀傳本《武王踐阼》」（二〇〇九年三月三日）

・蘇建洲「說《武王踐祚》簡3"曲（从木）"字」（二〇〇九年三月十一日）

・劉洪濤「上博竹書《武王踐阼》所謂"卣"字應釋為"戶"」（二〇〇九年三月十四日）
・劉雲「上博七詞義五札」（二〇〇九年三月十七日）
・許文献「上博七釋字札記—《武王踐祚》"柩"字試釋」（二〇〇九年三月二十二日）
・福田哲之「《上博七・武王踐阼》簡6、簡8簡首缺字說」（二〇〇九年三月二十三日）

■復旦大学出土文献与古文字研究中心（http://www.guwenzi.com/Default.asp/）

・復旦大學出土文獻與古文字研究中心研究生讀書會「《上博七・武王踐阼》校讀」（二〇〇八年十二月三十日）
・蘇建洲「《上博七・武王踐阼》簡6「卹」字說」（二〇〇八年十二月三十一日）
・程燕「上博七讀後記」（二〇〇八年十二月三十一日）
・季旭昇「上博七芻議」（二〇〇九年一月一日）
・劉信芳「竹書《武王踐阼》"反戾"試說」（二〇〇九年一月一日）
・小龍「也說"幾"、"(微-彳)"」（二〇〇九年一月二日）
・郝士宏「讀《武王踐阼》小記一則」（二〇〇九年一月二日）
・沈培「《上博（七）》殘字辨識兩則」（二〇〇九年一月二日）
・侯乃峰「《上博七・武王踐阼》小箚三則」（二〇〇九年一月三日）
・劉洪濤「談上博竹書《武王踐阼》的機銘」（二〇〇九年一月三日）
・程燕「上博七《武王踐阼》考釋二則」（二〇〇九年一月三日）
・張振謙「《上博七・武王踐阼》箚記四則（二〇〇九年一月五日）
・劉洪濤「《民之父母》、《武王踐阼》合編一卷說」（二〇〇九年一月五日）
・劉雲「說上博簡中的從"屯"之字」（二〇〇九年一月五日）
・張崇禮「釋《武王踐阼》的"矩折"」（二〇〇九年一月五日）
・胡長春「釋《上博七・武王踐阼》」（二〇〇九年一月五日）
・蘇建洲「《武王踐祚》簡4「悤」字說」（二〇〇九年一月五日）
・劉剛「讀簡雜記・上博七」（二〇〇九年一月五日）
・程燕「《武王踐阼》"戶機"考」（二〇〇九年一月六日）
・郝士宏「再讀《武王踐阼》小記二則」（二〇〇九年一月

六日）

・陳志向「《上博（七）・武王踐阼》音讀」（二〇〇九年一月八日）

・劉秋瑞「再論《武王踐阼》是兩個版本」（二〇〇九年一月八日）

・高佑仁「也談《武王踐阼》簡1之「微喪」」（二〇〇九年一月十三日）

・楊澤生「《上博七》補說」（二〇〇九年一月十四日）

・趙平安「《武王踐阼》"曼"字補」（二〇〇九年一月十五日）

・侯乃峰「上博（七）字詞雜記六則」（二〇〇九年一月十六日）

・劉信芳「《上博藏（七）》試說（之三）」（二〇〇九年一月十八日）

・小龍「論《武王踐阼》之"柴"應爲"斤柴"」（二〇〇九年三月十九日）

・許文獻「上博七《武王踐阼》校讀札記二則」（二〇〇九年三月三十一日）

■簡帛研究（http://www.jianbo.org/）

・李鋭「《武王踐阼》研讀」（二〇〇九年一月二日）

（竹村渉）

『鄭子家喪』（ていしかそう）甲本・乙本

（1）書誌情報

原釈文者は、陳佩芬氏。篇題はなく、題名は冒頭句「鄭子家喪」に基づいてつけられた仮称である。甲本・乙本の二種があり、竹簡数は各七簡、いずれも満写簡。甲本・乙本の内容に大きな相違はなく、それぞれ各簡の文意は連続している。甲本の最終簡（第七簡）には、墨釘と一字分の留白とがあり、篇末であることを示している。

【甲本】全七簡、全て完簡。簡長は三十三．一～三十三．二㎝、簡幅は〇．六㎝、厚さ〇．一二㎝。編綫は両道。右契口。簡端は平斉。各簡には三十一～三十六字が記されており、総字数は二百三十五字。そのうち合文は三。

【乙本】全七簡。陳佩芬氏は第五簡のみ完簡、残りを残簡とする。ただし、図版を参照すると、第五簡上端に欠損が確認でき、第五簡上端にもう一字分あった可能性がある。簡長は、最長（完簡）で四十七．五cm（第五簡）、最短（残欠簡）で三十四cm（第四簡）。簡幅は〇．六cm、厚さ〇．一二cm。編綫は両道。右契口。簡端は平斉。各簡には二十八～三十四字が記されており、総字数は二百十四字。そのうち合文は三。甲本に比べて字間が広い。字体は甲本と異なり、明らかに別の書写者による。欠損部分が散見されるが、甲本との対照により、欠損部分の文字とおおよその内容との復原が可能である。

なお、陳佩芬氏による「釈文考釈」には、最後に甲本・乙本の対照表が付されている。

（2）概要

「鄭子家喪」とは、鄭の子家が亡くなったことを示す。本篇は、鄭の子家の死より始まり、楚の荘王による鄭の包囲と、その鄭を救援しに来た晋との戦い（邲の戦い）とが記された文献である。

「子家」は、春秋時代の鄭国の卿であった人物（名は帰生。？～前五九九年）であり、『左伝』宣公四年（前六〇五）や『史記』鄭世家などの伝世文献に登場する。

その内、本篇中でも挙げられている子家の霊公弑殺に関しては、『左伝』宣公四年に次のような記事が見える。

楚人が、大きなすっぽんを鄭の霊公に献上した。その際、子公の人差し指が動き、子公は過去にこのようなことがあった後には、必ずご馳走にありついたものだと子家に告げた。その後、実際にすっぽんが調理されているのを見て、子公と子家は顔を見合わせて笑った。その様子を見、二人の笑った理由を知った霊公は、すっぽんを子公にのみ振る舞わなかった。子公は怒り、霊公の殺害を子家に持ちかけた。讒言を恐れた子家はその策謀に従い、子公と謀って霊公を弑殺した。

以上のように、霊公を殺害したとされる子家であるが、本篇はまず、その子家の死を聞いた楚の荘王が、子家の君主弑殺について大夫と語る場面から始まる。

子家の死亡報告を受けた荘王は、事件当時、楚国は疲弊しており、何もできずに今に至ってしまったと大夫に語る。しかし、荘王は、君主弑殺の大罪を犯した子家が

丁重に埋葬されようとしているのをこのまま見過ごすことで、上帝や鬼神の怒りを招いては、諸侯の長としての立場がないと考えた。そこで、楚は軍隊を発動し、鄭を三ヶ月もの間包囲した。

鄭人が荘王に攻撃の理由を尋ねると、荘王は、子家が天下の礼を乱し、鬼神の災いを恐れずにその君主を弑殺したにも関わらず、死後も高い地位にあり、丁重に扱われていることの不条理を正すためと答えた。荘王より返答を受けた後、鄭人は公子の子良を人質として楚に差し出し、子家を粗雑に埋葬することで、荘王の許しを得た。

また、楚が軍隊を引き上げようとした時、晋が鄭を救おうと進軍してきた。荘王は帰還の途につこうとしていたが、大夫たちの「楚が軍を出動させたのは子家のことがあったからであり、晋は今まさにその子家を救おうとしている。王はこのまま進軍し晋を撃つべきだ」という進言により、楚は晋と両棠に戦い、晋軍に大勝した。

このように、本篇は子家の死を契機とする、楚と鄭・晋との攻防を描いた、楚の在地性文献であると言える。

（3）補足・その他

・本篇には、『左伝』や『史記』などの伝世文献と対応する記事が見られる。鄭の子家が君主（霊公）を弑殺した点や、死後に子家の棺が粗雑に扱われた点が、それに該当する。しかし一方で、子家の死をめぐる楚の鄭への攻撃を、逆賊制裁という形で正当化する内容は、伝世文献には含まれていない。このように、鄭を囲み晋と両棠に戦ったことに関して、楚の視点が描かれている点に本篇の特色がある。

・上博楚簡中にはこれまでに、荘王・霊王・平王・昭王・簡王などの楚王説話が含まれており、本篇もそうした楚王説話の一つであると考えられる。なお、上博楚簡において本篇同様、荘王が登場する文献としては、他に『荘王既成』がある。

・本篇中には「如上帝鬼神以為怒、吾将何以答。（如し上帝鬼神以て怒を為さば、吾将に何以て答えんとせんや）」とあり、「上帝」「鬼神」を意識させる荘王の態度が窺える。他の楚王説話においても、「上帝」「鬼神」が登場する例が多く見られ、今後本文献との比較・検討が待たれる。

（4）参考文献

■簡帛網（http://www.bsm.org.cn/）

・陳偉「《鄭子家喪》初読」（二〇〇八年十二月三十一日）

・凡國棟「釈《鄭子家喪》的"滅覆"」（二〇〇八年十二

月三十一日）

・凡國棟「《上博七・鄭子家喪》校読札記両則」（二〇〇八年十二月三十一日）

・何有祖「上博七《鄭子家喪》札記」（二〇〇八年十二月三十一日）

・羅小華「《鄭子家喪》、《君人者何必安哉》選釈三則」（二〇〇八年十二月三十一日）

・熊立章「読釈"舂"及《上博七》中的幾個字」（二〇〇九年一月八日）

・陳偉「《鄭子家喪》通釈」（二〇〇九年一月十日）

・李天虹「《鄭子家喪》補釈」（二〇〇九年一月十二日）

・劉雲「上博七詞義五札」（二〇〇九年三月十七日）

■復旦大学出土文献与古文字研究中心

（http://www.guwenzi.com/Default.asp/）

・復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会「《上博七・鄭子家喪》校読」（二〇〇八年十二月三十一日）

・程燕「上博七読后記」（二〇〇八年十二月三十一日）

・郝士宏「読《鄭子家喪》小記」（二〇〇九年一月三日）

・張新俊「《鄭子家喪》"愿"字試解」（二〇〇九年一月三日）

・一蟲「由《鄭子家喪》看《左傳》的一処注文」（二〇〇九年一月三日）

・葛亮「《上博七・鄭子家喪》補説」（二〇〇九年一月五日）

・侯乃峰「《上博（七）・鄭子家喪》"天後（厚）楚邦"小考」（二〇〇九年一月六日）

・孟蓬生「"迈"讀為"應"補證」（二〇〇九年一月六日）

・楊澤生「《上博七》補説」（二〇〇九年一月十四日）

・高佑仁「釈《鄭子家喪》的「滅厳」」（二〇〇九年一月十四日）

・侯乃峰「上博（七）字詞雑記六則」（二〇〇九年一月十六日）

・劉信芳「《上博藏（七）》試説（之三）」（二〇〇九年一月十八日）

・郭永秉「《競公瘧》篇"病"字小考」（二〇〇九年一月二十三日）

（金城未来）